

中部の

# エネルギーを築いた人々

## 三吉電機工場の徒弟を経て、浜松電灯・飯田電灯・日英水電の技師として活躍した林助男



三吉正一



林助男

林助男は、三吉電機工場の徒弟からスタートし、飯田電灯、浜松電灯、日英水電、伊東水力電気などの技師や主任技術者として活躍した電気技術者である。明治元年1月、金沢市鷹匠町に旧金沢藩士の子として生まれ、郷里で師範学校を卒業、2年ほど小学校教員を勤めた。明治19年、郷里出身で東京電灯の機関係に勤めていた黒川犀三郎を頼って東京に出た。東京電灯では見習生となったが、黒川の上司であった技師長藤岡市助のはからいで三吉電機工場に移った。同工場では、電灯器具を扱う第2部の助手

となり、後に精密測定器を扱う第5部の主任となった。三吉電機はわが国重電機メーカーの草分けであったが、日清戦争後、資金調達に行き詰まり、また工場主三吉正一が病に罹り、明治31年、廃業やむなきに至った。林は、上京以来10年を三吉電機で働き「三吉工場は私の恩人」と回想している。この間林は明治22年に工手学校電工科（第1回生）を卒業している。

## 浜松電灯・日英水電 吸入ガス火力を計画

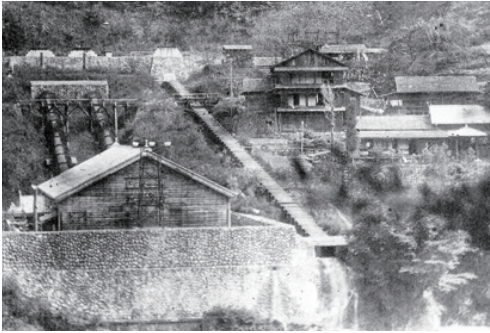
三吉電機工場が廃業した後、林は同社の顧問技師で、『電気之友』を主宰した加藤木重教の紹介で、地方の電気会社の技師・主任技師を勤めた。明治31年から前橋電灯会社に3年、小樽電灯舎に2年、静岡県入山瀬に工場を持つ富士製紙(三吉電機時代、同社の電気設備導入に関わった)に2年、さらに九州熊本に工場を持つ九州製紙に2年間勤務している。

明治42年10月、浜松電灯(明治37年1月開業)の主



林助男「日英水電株式會社 小山發電所設備について」(『電気之友』大正2年2月)

任技師伊藤俊記と入れ替わる形で同社主任技師に就任した。(伊藤は熊本県出身でそのための交替であろう。)浜松電灯は、日露戦後、産業が発展し電力需要が急増していた。林は、水力適地を持たない同社の現況を考慮して、当時普及し始めていた吸入ガス火力の導入を計画した。日本で最初にガス機関を導入した茨城電気などを調査(明治43年)し、高田商会に装置を発注したが、明治44年7月、大井川上流に小山発電所(1400kW)を建設していた日英水電と合併



日英水電 小山発電所 昭和初期



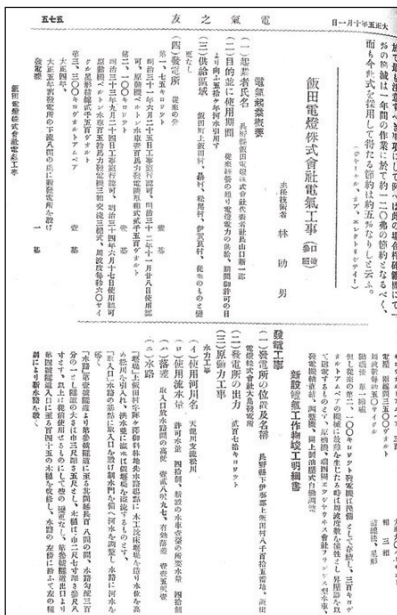
小山発電所跡

し、ガス火力の計画は打ち切れ、林は島田支店長(旧島田電灯、明治45年合併)兼島田変電所主任となった。明治45年6月に小山発電所は運転を開始するが、その年9月22日暴風雨に見舞われた。林の報告(『電気之友』321号、大正2年2月)によると、「刻一刻の増水にて水槽溢して土石と共に発電所の屋根を破壊し、変圧器を浸し尾溝より押込めしたる水は発電所の窓より入り来り発電機は泥

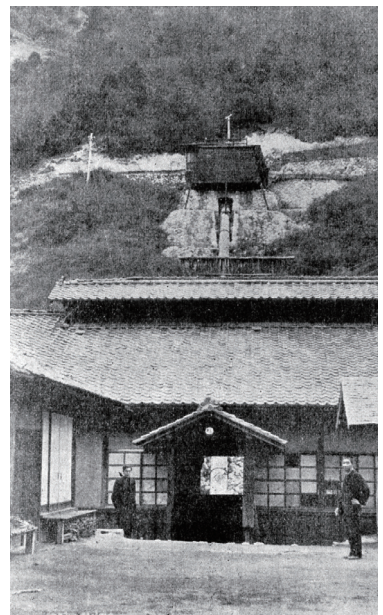
土の中に埋没」、堰堤は壊滅的被害を受けたという。同年12月にも大雨に見舞われ、仮復旧した設備は再び被害を受けている。このため、林の計画したガス火力(浜松第2火力、200kW)は急遽復活され、市内野口町で運転を開始した。さらに大正2年9月には同所に蒸気タービンによる野口発電所1000kWの建設も進められた。

## 飯田電灯主任 松川第2発電所

大正5年には、日英水電を離れて、飯田電灯に移籍した。同社は、明治32年12月、松川筋に水力発電所を建設して飯田町に電灯を供給していた。林の転任はちょうど3号機(旧発電所8間下流の地点、270kW)を増設していた際中で、その据付運転にあたった。以来、同発電所は良好な運転を続けた。林には思い出深い発電所で



林助男「飯田電灯株式会社電気工事」  
(『電気之友』大正5年10月)



飯田電灯 松川第一発電所



あったようで、「予が手により養成せられたる最愛の子女」と呼び「予が功名半ば此機に在り」と記している。林は第4次増設工事(松川第2発電所、256kW)を命じられて設計を進め、大正7年に完成する予定であったが、同7年7月伊那電気軌道に合併され、松川第2発電所は同社に引き継がれ、翌8年4月に運転を開始している。水車は電業社製、発電機は芝浦製作所製であった。



飯田電灯 松川第一発電所第3次増設工事

## 伊東水力電気 白田川発電所の建設

大正7年、飯田電灯を離れた林は、藤岡市助が設立(明治40年8月)に関わった岩国電気軌道の技師に招かれたが、間もなく小瀬川電気と合併(大正9年、岩国電気に改称)、林は同社を辞している。その後伊豆半島の2大電気会社の一つ、伊東水力電気の主任技師に就任している。同社は三吉電機の設備を導入して事業をスタートしており、そのことも入社の一きっかけとなったのであろう。林は工務部門の責任者として、昭和3年に引退するまでの間10年あまり勤めている。大正12年頃需要が増えて発電所増強に迫られ、林は「社長の命を体して天城山麓を一周して白田川の水利に意を注ぎ別に白田川水力電気株式会社(後に伊豆水力電気)を企て伊東町へ送電せんと欲す、社長(佐藤吉兵衛)の实地検分を乞ふ、社長快諾して大正12



伊東水力電気社長 佐藤吉兵衛

年5月18日、会社員と発電所地点を巡視して将に取入口の水路に趣むかんとし、険坂の途中不幸にして馬より落ちて負傷」(『電気之友』大正14年4月)、これが因で大正13年11月逝去している。佐藤社長の死後、河津川水力電気と共同で開発することとなり、伊豆水力電気を設立、昭和2年1月、白田川発電所(1200kW)が完成する。発電所完成後の昭和3年に林は事業から引退し、その後は東京に移り、昭和15年4月、74歳で没した。林は筆まめで、勤務した地域の電気状況を『電気之友』にしばしば寄稿し、当時の電気事業を語り伝えている。穏和な人柄で、多くの友人と交友しつつ送った電気人生であった。

(浅野 伸一)



白田川発電所現況(写真東伊豆町提供)